



“コラボ”で生まれる面白さを探して



p5_ サポセンの事業報告

p6_ [チャレンジャー]
NPO 法人仮り暮らし

p6_ サポセン新規届出団体

p7_ [スタッフコラム]
教育と市民活動のいい関係!?

p8_ [ある日のサポセン](番外編)
センターの講座が目指すところ

特集 “コラボ”で生まれる面白さを探して

「協働」をうまく活かして面白くする秘訣とは？



有志を募って小学生向けの企画づくりも



初対面同士で協力して謎解きにチャレンジ中



ヒントを探して館内をぐるぐる…みんな汗だく!



えっ
これって
公共施設の
イベントなの？

2018年夏、イベントのインパクトのあるチラシ。このチラシは青少年会館で行われた、中高生〜30代を対象とした謎解きイベントを告知するために作られたものです。

この事業は行政とNPOが協働(コラボ)することで実現した企画で、昨年の夏に開催されました。

今回はそんなコラボの面白さについて掘り下げたいと思います。

「青少年会館って夜になると変な声が聞こえるらしいよ。」
ただの噂ばなしだと思われていたこの話。
ある時、噂を聞きつけた霊媒師が訪れるところから今回の話は始まります。……

そんなストーリー設定で企画されたこのイベント。内容は参加者たちがグループを作り、会館に隠された様々な謎を解きながら、課題をクリアしていくというもの。近年流行っているリアル脱出ゲームと言われるジャンルのものです。

イベント当日には約40名の中学生〜30代の参加者が集まり、初めて会った人同士も仲間で協力しながら問題に取り組んでいる様子が見られました。中には赤ちゃん連れの夫婦と中学生が一緒になったチームも。最初はぎこちない雰囲気でしたが、**ゴールの時には仲良くなっていたりするのが不思議です。**

この事業は2017年から始まった、「青少年会館」と「だいき松戸！子どもフエティバル実行委員会」が協働で実施しているプログラムの一環で行われました。**中高生を中心とした若者を巻き込みながら、小学生たちと関わる地域の担い手を育成する**という趣旨で企画されたとのこと。中高生というなかなかアプローチするのが難しい年代にどうすれば興味を持ってもらうことができるのか。そんな課題を考えていくうちに出てきたアイデアが脱出ゲームだったとのこと。

INFO

青少年会館とは？

仲間づくりの場や学習機会を提供し、地域社会で自己・相互に活動する青少年の育成を目指している公共施設です。青少年会館では、小学生から35歳位までの人を対象に、講座・イベントなどを開催しています。

松戸市新松戸南2の2
JR新松戸駅下車、徒歩約15分



「呪われた青少年会館」というタイトルからしてかなり攻めているイベントがなぜ実現できたのか？

その仕掛け人である青少年会館の職員と協働相手である団体の方にインタビューをしました。

協働相手

若者の目線に立った巻き込み方を大切に

だいすき松戸！
子どもフェスティバル
実行委員会 事務局
小熊浩典さん



仕掛け人

中高生が振り向き飛びぬけた企画を

松戸市役所
青少年会館職員
松本優子さん



どうしてこのような企画になったのでしょうか？

2年を迎えるこの協働事業は「子どもたちがつくる青少年会館居場所事業」として、小学生も中学生も学生も、ゆるやかにつながる・肩肘をはらずに、「友達同士」のように関わりあえるような取り組みです。

どうやって小学生向けの企画を考えてくれる中高生・学生に興味を持ってもらうか、一番面白そうなことはなんだろう？と相談する中で、この脱出ゲームになりました。



若者と一緒に活動する上で気を付けていることは何ですか？

自分のことも含め、どうしても年代が離れると遊びの中身や生活スタイルなども変わり、子ども・若者の「感覚」から遠ざかってしまうと思っています。子どもたち・若者の中で流行しているものを知ったり、関心を持ったりと近づく努力一層とまではまだ違うんですが必要と考えてます。よく「若者の〇〇離れ」と言われますが、あれは「オトナ」「世間」が若者から離れているんだと思います。とはいえ、年が離れるにつれて子ども・若者からの違和感が増えるので、年齢の階段をつなげる一大人→学生、学生→中学生、中学生→小学生とつながるのが理想ですね。あとは子どもだから、大人だからではなく、対等に自分が考えていること、自分の気持ちを伝えることですね。



行政と協働していく中で難しかったことはありますか？

やはり前もって決めておくことが多いな、という印象はあります。とはいえ、青少年会館との間では柔軟に対応いただいているので、これだけの魅力的なことができていて、という実感があります。どちらかというと、どうやって中高生の手元に届けようと考えた時に、青少年会館という教育行政機関からでも学校を通じて子どもたちの手元に届けるのには、各学校に直接チラシを持っていかないとけなかつたりと制約・手間が多く、時間がかかるほうが大変ですね。



どのような経緯で「コラボ」に至ったのですか？

これまでも中高生を対象とした講座なども行ってきましたが、なかなか集客も難しかったり、担い手として育成するというのはさらにハードルが高いものでした。地域で活動をしている団体との協働ということで、普段自分たちだけでは企画できないのをやりたいと考えました。



なかなかインパクトのあるチラシですが反対意見はありませんでしたか？

これまでに中高生を対象として上手くいかないという悩みがあったので、思い切った企画にしようという点で反対はありませんでした。ただ1件だけ市民の方から呪われたというのはいかがなものか？というお言葉をいただきましたが…。



実際に告知をしてみて反響はどうでしたか？

これまでにない反応で、あっという間に数十名の申し込みが来ました。参加してくれた人たちは中高生はもちろん、20代や30代で友達同士、夫婦で来た人などもありました。普段の参加者層とは全く違う感じでしたね。



全身マントの霊媒師役は…青少年会館職員！



Collaboration!

協働をうまく活かして 面白くする秘訣は何でしょうか？

話し合いで出された案は
可能な限り実現させること！

行政の事業はどうしても規制が多くなってしまっただけですが、せっかく協働で行うのなら何でもやろう！との思いで取り組みました。また、担当者も楽しみながら進めることが秘訣だと思います。(松本さん)

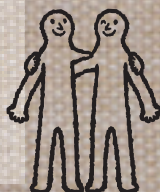


現場の視点・当事者の視点で
「いい」と思ったものを
納得してもらおうための努力！

青少年会館だと「子どもたちのために」となりますが、ひとつの課題に対して解決したい、良くしたいという気持ちは同じはずなので。(小熊さん)



結局は人と人との
関係づくりから



まとめ

今回の事例は行政と民間の力を出し合って、「上手くいった」協働だと思います。一方でなかなかお互いの良さを活かしきれず、発展できなかったケースも多々あるのが実情です。その違いは何なのか？を考えていくと、制度や仕組みの制約もありつつも、最後にはお互いの状況を理解し合いながら、目的を共有し信頼関係を築くことにあるのでは、と感じたインタビューでした。

ご存知ですか？

「協働事業提案制度」

新たな課題に対応し、
これまでにない取り組みを行う
「協働の先進的なモデル事業」
を募集しています！

市民活動団体又は事業者の発想や手法を活かし、提案者と市が事業の企画から実施までを協力して行うモデル事業を募集する制度です。事業を進めるにあたっては、社会資源持ち寄りの原則に基づき、団体自らが自己資金を支出するほか、市では負担金50万円以内を支出します。

まつど地域活躍塾

公開講演会を開催しました！

「まだ食べられるものを捨てる国に住んでいる私たちに、できることはなんだろう。」

2017年に開講し、今年で3年目となる「まつど地域活躍塾」。「作ってもらう人より、創ってゆく人の方がおもしろい」をスローガンに、これまで仕事や育児などに忙しく地域になかなか関わってこれなかった...という方でも、まずは地域のこと・地域の様々な活動等について学べ、さらに地域の団体で実際に活動の体験までできる、約8か月間にわたる超・長期&実践型の塾です。

今年度の塾生募集に先立って、去る2019年5月28日、市民劇場にて公開講演会および入塾説明会を実施しました。

講演会のテーマは「社会的孤立を地域で解決するヒントを探る」フードバンク山梨の事例から「子どもの貧困」や「社会的孤立」といった課題に対して、同じ山梨という地域で異なるアプローチで実践が続けられている2人のゲストをお招きしました。

120名の方にご来場いただきました！

一人は、まだ食べられるのに破棄されようとしている食材を集め、必要としているご家庭や施設に届ける活動をされている認定NPO法人フードバンク山梨理事長の米山けい子さん。
もう一人は、多様なおとなが関わることで子どもを支える場づくりをされているNPO法人bond place理事の加藤香さんです。

当日は一般の方と市職員あわせて120名の方にお越しいただき、会場からの質問も多く寄せられパネルディスカッションも盛り上がりました。

そして7月からは連続講座となる第3期地域活躍塾がスタートしました。それぞれ地域で実現したい想いを持った方が受講生が集まり、毎回熱気あふれる講義が行われています。

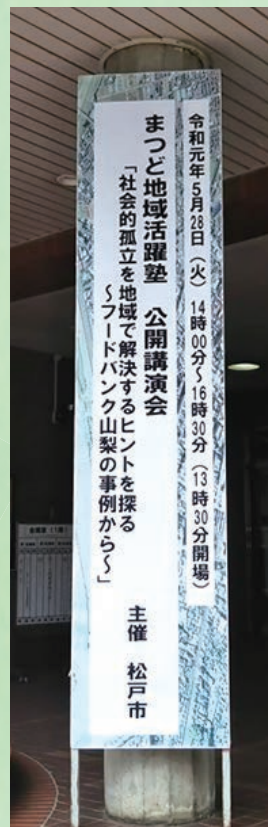


↑山梨で年間68トン、金額に換算すると4000万円もの食品(2017年実績)を必要な人に届けているフードバンク山梨の米山けい子さん

食を超えて子どもたちの居場所や学びの場づくりをコーディネートbond placeの加藤香さん



↑盛り上がったパネルディスカッション



あなたの「できる」が、
まつどを変える。



まつど地域活躍塾の
詳細に関してはこちら。

<http://www.matsudo-sc.com/works/mjuku>

10月頭~12月頭にかけて実施する
実地体験のみの参加者も募集します。
詳細は決まり次第、サポートセンター
HP等でお知らせいたします！

Challenger



HPはこちらから



〈チャレンジャー〉
市民活動団体紹介

NPO 法人 仮り暮らし

お問合せ

代表 徳永 晃代 TEL 043-330-3192
E-mail info@karigurashi.or.jp
twitter @npokarigurashi
HP https://karigurashi.or.jp/

自分の居場所が見つからない
子どもやおとなに、寄り添うために

「身を寄せるところが無い」そんな子どもたちを一時的に保護したり、就職したいけどできない大人の就労を支援したり、そんな場を作りたいと2015年から活動開始(2018年4月にNPO法人格を取得)。

昨今、家出した若者が犯罪に巻き込まれる例が後を絶ちません。代表の徳永さんは身内が家出した経験から、それらのことが他人事と思えず、自分の居場所が見つからない子どもやおとなに寄り添っていきたくないと仲間を募って活動を始めました。

一緒に暮らしながら
自分の暮らしを見つけられる場所

拠点探しをしていた昨年の夏、偶然、空き家を保有している活動者と出会い、居を構えます。そこは、江戸川が近い普通の一軒家。代表の徳永さんと仲間の江頭さん、そして現在は、家に戻りたくない女性2人が一時的に一緒に暮らしています。

利用者が一緒に暮らしながら自分の暮らしを見つけられるようにと名付けた団体名の通り、まさに「仮り暮らし」の家。普段の情報はFacebook、TwitterなどのSNSで発信しており、寄せられる情報は近隣だけでなく全国から来るそうです。

家を出てしまう前の子どもたちの居場所をつくりたい!

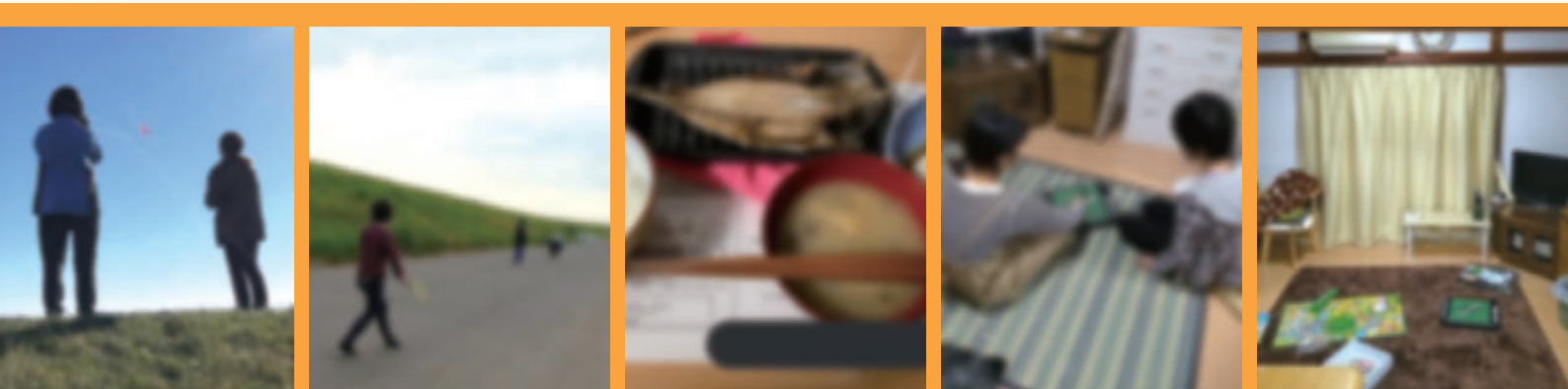
長期休みには、「仮り暮らしのお家を無料開放!」と「居場所づくりプロジェクト」を実施しました。年末年始と春休みに数人の子どもから問い合わせがあり遊びに来たことから、ニーズがあることを確信。今後は、「家を出てしまう前の子どもたちの居場所となるような、マンガ喫茶のようなたまり場をつくりたいんです。」とアツク語る徳永さん。

安く借りられる駅に近い空き店舗を知ってるかた、ぜひご連絡を!

年末年始☆居場所づくりプロジェクト
一緒に過ごそうよ。
ゲームをしたり映画を見たり読書をしたり。
はたまた、気ままに過ごしたり。
1人でも、友達と一緒にでも。
～軽食(夜食も)あります～

- 対象: 12歳までの男女、13歳以上の女子
- 期間: 2018/12/30(日)～2019/1/3(木)
- 時間: 09:00～21:00

*18:00以降もご利用の場合は、保護者さんに許可をもらってください。
開催地の場所が分かりにくいので、バス停「栗町西交差点」に書いてある「仮り暮らし」の看板を見てください。
TEL: 043-330-3192 もしくは
MAIL: info@karigurashi.or.jp
に「遊いたよー」「今から行ってもいい?」などご連絡ください!



どこでもいいからどこかにいきたい... 仮り暮らしに相談してみませんか?



サポセン 新規届出団体 を紹介します!

(2019年4月1日～6月30日
届出順・敬称略)

- ★ぶぶぶママ大学 ★心理学セッション ★千葉少年友の会松戸支部
- ★ドリーム・チーム ★まつど市民活動サポートセンター緑いっばいさぼーとチーム
- ★グループSEC ★郊外大橋町会 ★みどり会フリーダンス ★サロン わたし
- ★千葉県パーキンソン病友の会 松戸ブロック
- ★Teen's 遊びと語りの場 まつど*あそびラボ ★みかん子ども食堂
- ★美*lien～ミリアン ★緑会囲碁教室燦燦 ★あいぞめ研究会
- ★ボードゲーム化石会 ★K&Jライフコミュニティ ★チームりぼんくらぶ
- ★つみきと造形Neiro ★さわやかダンスK2
- ★日本ハウスクリーニング協会(千葉校) ★特定非営利活動法人エンリッチ

スタッフコラム

教育と市民活動のいい関係!?

「自分が行動することで、変わってほしい社会の現象が少し変えられるかもしれない」平成26年のデータによると、日本の13歳〜20代の若者の30.2%がそう思う、と答えたそうです。皆さんはどう感じますか？今回はそんな話をしたいと思います。



まつど市民活動サポートセンター
センター長
阿部 剛

投票率196カ国中158位の日本

選挙が行われるたびに投票率の低さが注目される日本ですが、諸外国と比べても残念な結果になっています。特に20代の若者の投票率が最も低く、35%前後を推移しているのが現状です。（総務省が公表している参院選挙におけるデータより）

また投票率だけではなく、自分自身に満足している、自分には長所がある、といった自己肯定感や、うまくいくかどうか分らないことにも意欲的に取り組む、といった若者の意識も低い傾向にあることはよく取り上げられることです。

自己決定できる機会が民主主義を育む

私自身は学生時代から子どもや若者と社会をつなぐユースワークに関わり、現在は週2回主に小学生の子たちの放課後の学びの場づくりをしているのですが、いろんな場面で子どもたちを見ていると「この後どうするの？」「あれやってみよう？」と指示待ち・許可待ちが多いことに気が付きます。それは普段、いかに大人が指示をして、許可をしているかの裏返しだと思います。

ドイツやスウェーデンでは、何十年にも渡って教育（子どもだけではなく大人も含めた生涯学習として）チャレンジできる機会が多くある（に力を注いできており、その結果として若者の投票率の高さにもつながっています。民主主義という、政治的なものに聞こえるかもしれないですが、根底には自分たちの人生・暮らしは自分たちで良いものにしていけるという意識があるのです。



市民活動の現場だから学べるシティズンシップ教育

では、日本ではどうすればこのような意識を高めていくことができるのでしょうか。私は市民活動の現場にこそ、そのヒントがあるような気がしています。市民活動は誰かから強制されるものでもなく、自分が実現したいことがあるからやるものです。サポートセンターでは毎年夏に、「Let's体験!!」という事業で若者を対象にボランティア体験のマッチングをしていて、「自ら選ぶ」ということ「自分の考えをカタチにする楽しさ」をキーワードにしています。実際に体験した子たちは自ら動くことの大切さに気が付いた、という感想も多々見られます。なかなか簡単なことではないですが、こうした経験が自然に地域で得られるようになっていきたいと思います。



夏のボランティア体験講座 「Let's 体験!!」とは？

中高生〜20代を対象とした夏のボランティア体験プログラム。毎年300名以上の参加者が約50の受け入れプログラムから自分の興味のあるものを選んで参加し、地域の活動に触れ、多世代と交流する機会を提供している。



↑ 幼児の広場でボランティアする中高生

センターの講座が目指すところ

これまで「ある日のサポセン」では、センターのコーディネーターと来館する皆さんの関わりをチラッと紹介してきましたが、今日の舞台はサポセンの「外」。そこにはどんな出会いとストーリーがあるのでしょうか…

一般社団法人 まつど地域共生プロジェクト「Mi-Project」の皆さん



代表の松村さんは、2016年の「まちづくりキーパーソン養成講座」に参加してから、医療・介護系の仕事で働く仲間が集い、交流しながら、地域に介護や医療福祉の専門職が活躍できる場として、「まつど暮らしの保健室」という健康相談などに取り組んでいます。

「ほっとする街を考える会 kinari」の皆さん

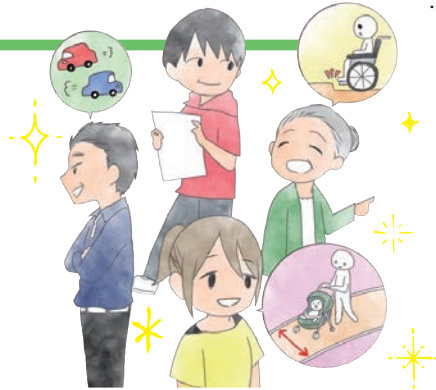


金ヶ作にあるコミュニティカフェ Choshi Yaを拠点に活動

2016年の「まちづくりキーパーソン養成講座」の参加メンバーが中心となり、茶話会や味噌作り・体操などをやる「kinari元気くらぶ」(松戸市通所型元気応援くらぶ事業)を始めました。



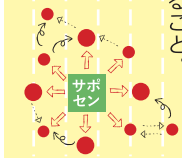
前年度 kinari が松戸市市民活動助成事業で制作した地域資源マップを使って、kinari・Mi-Project の2団体、そこに近隣の里やま=三吉の森を管理する、松戸里やま応援団「三樹の会」が加わって企画をし、バリアフリー視点の街あるき・森あるきをオープンフォレストに併せて開催しました。



ベビーカーだとこの道幅はどうだろう？車椅子でこの段差は通れるかな？実は森の中も車いすの方も楽しめる場所が！など、天気はあいにくだったようですが、無事開催できたようです。kinari の堀井さんにインタビューで訪ねたとき「それぞれが、できること・できないことがあるので、役割分担する」といふと思う。「できないことを引くのではなく、『足し算』の発想で」とコラボの秘訣を伺うことができました。

サポセン「外」では日々講座や情報発信などを行っていますが目指したいのはそれが縁となって松戸のあちろちろで活躍する人が増え、つながること。「やりたいことをやっている人たちが、お互い認めあつていくといいんじゃない？」

会話の中で生まれたそんなフレーズである日のサポセン「外」を締めたいと思います。



サポセン ニュースレター 第17号(2019年初秋号)



発行日：2019年9月15日(※年4回発行)
発行元：まつど市民活動サポートセンター(指定管理者 NPO 法人まつど NPO 協議会)
デザイン：トクナガリッコ

「ぼっく」の主な設置場所
松戸市内の図書館、市民センター、公民館など各種公共施設の外、松戸駅自由通路に設置しています。

「ぼっく」設置協力店
Sampo Café(八ヶ崎7丁目)
古民家ホームシェア co-no-mi(吉井町2丁目)
松戸観光案内所(本町)

「ぼっく」の配架にご協力いただけるお店・施設を募集します！

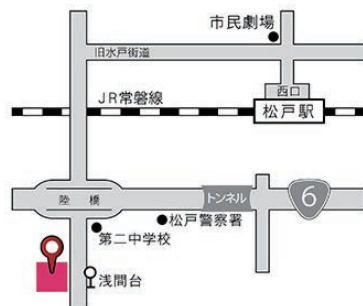
ニュースレター「ぼっく」を、お店や施設に配架していただけますか？ご協力いただいたお店・施設は、この欄で名称・所在地等をご紹介します。もちろん、無料でお届けし、部数もご要望に応じます。広告掲載も募集中です。詳しくは、まつど市民活動サポートセンターまで、お電話・メール等でお気軽にお問合せください。



サポセンで会う、生き生きとしたシニア世代の方やしっかりした若者を見るにつけ、実年齢って何の物差しにもならないんだなと思うこの頃です。自分に合う場を見つけて一気に若返る方や、その逆もあって、人生勉強になる日々です。(菊)

まつど市民活動サポートセンター

〒271-0094 松戸市上矢切 299-1(総合福祉会館内)
TEL：047-365-5522 FAX：047-365-5636
E-mail：hai_saposen@matsudo-sc.com
URL：http://www.matsudo-sc.com/
facebook：https://www.facebook.com/matsudo.sc



◎開館時間：月曜～土曜…9時～21時
日曜…9時～17時
◎休館日：第1・第3水曜、年末年始(12/29～1/3)